

## ヨンビ＝オパンゴ4代大統領の軌跡 ①



ヨンビ＝オパンゴ大統領

新型コロナウイルスの第一波がイタリアやスペインなど、ヨーロッパの各地で猛威をふるうなか、フランスでも3万人を超える死者がでたが、そのなかにコンゴ共和国の元大統領が含まれていた。コンゴ4代大統領ヨンビ＝オパンゴ (Jacques Joachim Yhombi-Opango) である。パリ郊外の病院で3月30日、81歳で死去した。

このニュースはフランスやコンゴで報じられたが、コンゴでの報道は一国の元大統領にしては「控えめ」であったように感じられた。コンゴ唯一の日刊紙である『Les Dépêches de Brazza』(4月1日付)でも、トップページの見出しには出ていたものの、記事自体の内容は、ほとんど現政権のコロナ対策に関するものだった。大々的に報じられないのには、独立後のコンゴの歴史のなかでの彼の「位置付け」が影響しているのではないかと思われる。コンゴが独立したとき彼は21歳。独立国家が辿っていくさまざまな出来事に、政治家として関わる彼の一生は、まさに波瀾万丈だったと言えるだろう。彼の生涯を振り返ることは、見方を変えればコンゴの歴史を辿ることでもあると言えるかもしれない。

彼は1939年1月、キュベット県の県庁所在地であるオワンド (Owando) で生まれた。いわゆる「北部」の出身である。小学校を出たあと、ブラザヴィルの軍隊学校に進学、軍人としてのキャリアを歩むことになる。57年から60年まで、植民地統治下でフランス軍としてチャドに赴任。18歳の時には、すでに伍長 (sergent) になっていた。60年から2年間はフランスでの軍事教練を受け、軍の位を順調に昇っていく。65年にはマサンバ・デバ大統領の下、軍の幹部となり、3年間ソ連に赴任した。69年には、発足したコンゴ労働党 (PTC) に参加し、政治の世界にも入っていく。74年からは、軍人としての立場を保持しつつ政界でも頭角を現し、治安や通信などを担当する閣僚を歴任していった。

デバ大統領が失脚し、マリアン・ングアビが3代大統領となり、コンゴは旧宗主国フランスや西側諸国から少しずつ距離を置き、ソ連や中国へ接近していくなかにあった。そして、1977年3月、現在でもその真相は謎に包まれているングアビ大統領の暗殺事件が起きるのだった。事態の収束を図るべく、「党軍事委員会 (Comité militaire du Parti)」が暗殺の同日に発足した。そして、そのトップがオパンゴだった。このとき彼はコンゴで初めてとなる大尉に昇格していた。この委員会は軍の高位にある11名で構成されていたが、そのナンバー2がオパンゴと同じボシ族 (mbochi) である少佐 (commandant) のサスングソ (Denis Sassou Nguesso、現コンゴ共和国大統領) だった。ちなみに、11人のメンバーのうち9人は北部出身の軍人であり、出自の偏重は明らかであった。1977年4月3日、暗殺された大統領の後任者として、オパンゴがコンゴ4代大統領に就任することが発表された。彼が38歳のときである。そして副大統領にはサスングソが指名された。状況からして当然の流れであったと言えるだ

う。

大統領就任に際してオパンゴは、前任者の政治路線の継続を誓った。つまり、社会主義路線を進めていくものである。その一方で当時の経済は、暗殺されたングアビ大統領のときからすでに大変厳しい状況にあった。したがって、税金の取り立てをより一層厳しくするなど、彼はさまざまな面で財政の立て直しにかかる必要に迫られていた。国の経済政策に関してオパンゴは、国营、民間、国营と民間のミックスと3つの経済レベルがあると考えていた。そしてコンゴにはまだ民間での経済開発の余地があることを力説し、この3つが平行して国の経済を牽引して行くことの重要性を訴えた。これは西側諸国にとっては、経済的な投資を期待させるものでもあったことだろう。

こうした方向転換には、彼のフランスとの距離にも大きく関係していたのではないだろうか。実際、外交面において、前大統領とは緊張状態にあったフランスとの関係の修復に努め、大統領就任の3カ月後の7月には、私的ではあるがフランスを訪問し、当時の大統領ジスカル・デスタンとの会談を行っている。この会談で、コンゴの鉱石資源の開発と国の経済の状況を調査するために、専門家の派遣の約束を取り付けた。また、西側諸国との修復は、13年間途切れていたアメリカとの外交関係を元に戻したことにも見て取れるだろう。



ジスカル・デスタン大統領と会談 (1977年7月)

ただ、国内の治安面はまだまだ混乱していた。そこで、治安維持に向けても積極的な方策を打ち出した。不法労働の取り締まりも強化し、多くの西アフリカ人 (セネガルやマリ) が追放された。彼の統治は社会のさまざまな面で「締め付け」が目立ったようだ。1978年1月には、ングアビ大統領暗殺に関わったという嫌疑で、10名が処刑された。そのすべてがプール県出身、つまり「南部」出身者であり、同じ容疑ですでに処刑されたデバ大統領に近い者だった。また、宗教に対しても厳しい対応を見せ、78年2月、カトリック、イスラム、コンゴ福音教会 (プロテスタント)、キンバングスム教会、ラシー・ゼフィラン教会、救世軍と天理教の7つを公認宗教とし、他の宗教を禁止した。(ちなみにこのニュースを伝える『Le Monde』誌には、天理教は現地の呼び名を反映してか、「Terynkyo」と表記されている。)

ただ、彼の政治路線や経済政策は国民の不満を増大させることになり、就任からわずか2年後の1979年2月、彼は大統領の座から降ろされてしまう。その後、サスングソが大統領となる。オパンゴの政治は、理念を貫くというよりか、その場その場で態度を変えるようなものだった。そして訪仏でも分かるように、彼はどちらかと言えば「西側」に近い立場にあった。したがって、この政権交代は確かに血を流さないものではあったが、フランスを危惧させるものでもあった。